パネル発表2

縁起思想の生命倫理学

鍋島　直樹
（龍谷大学）

序　生命倫理学とは

新しい生命工学が進展する時代にあって、その技術をどのように用いれば、生命の尊さを守ることになるのかが問われている。二十一世紀の世界は、アモラル、無倫理の時代といってもいいだろう。ただちに、経典や聖書に明確な倫理指針が示されているというわけではない。法律自体も時代とともに変遷していく。そういう時代だからこそ、今を生きる私たちが、約二千五百年もつづいてきた仏教の真理に照らして、いのちの尊さを守る道について真摯に考えつづけることが大切なのではないだろうか。

バイオエシックスとは、ジュージタウン大学ケネディ研究所の『バイオエシックス辞典』（一九七八年初版）の編集者代表のW・T・ライク（Reich, W. T.）によれば、[1]「生命科学と保健医療（ヘルスケア）における人間の行為を倫理的価値と原則の見地から検討する体系的な研究」としている。

このように、生命倫理とは、生命操作について人として歩むべき道筋を示す学問であり、保健医療に関する倫理指針や政策を方向づける総合的研究である。世界の国々における倫理指針は、患者と医師とのインフォームド・コンセントや生命の安全性を重視し、医療や畜産などの諸関係機

関における倫理審査委員会の役割を強調している。

一　仏教からの生命倫理研究の目的と意義

日本における生命倫理研究は、欧米の生命倫理を中心に輸入紹介されてきたため、日本文化や仏教生命観に基づく独自の生命倫理が充分に確立されてこなかったという反省がある。例えば、日本医師会第Ⅷ次生命倫理懇談会報告書『医療の実践と生命倫理』において、森亘座長は、次のように記している。

最近の日本では、ややもすれば欧米先進諸国で行われていること、少なくともそこで理想とされていることがわが国にとっても有益、理想であるとして、必ずしも思慮深い検討を経ることなくそれに倣おうとする傾向があるが、それは適当とは考えられない。「医療の実践と生命倫理」についてもわが国にはわが国に、東洋には東洋に、独自のものがあってしかるべきであり、もう少し自らの伝統、文化、人々の考え方を見直し、それらに相応しい医療倫理を模索すべきであろうとするものであった。しかしさらに重要な点は、いわゆる東対西、東か西かといった対立的な構図ではなく、仮に東と呼ばれるものも、西と呼ばれるものも、それらの根底には少なからず共通するものがあり、われわれは東でも西でもなく、むしろそれらの基礎をなす、より根源的、人間的医療倫理をこそ探るべきである。(2)

そこで、この研究は、まず西洋における生命倫理の成果を学び、その欧米の生命倫理と仏教の生命観とをうまく組み合わせながら、「縁起の生命倫理」の理念と方向性を樹立していくところにその目的と意義がある。

二　西洋における生命倫理の四つの原則

西洋における生命倫理には次のような特徴がある。第一に、生命倫理と一言でいっても、伝統的な生命観を尊重するヨーロッパでは、アメリカと異なり、独自の展開を見せている。アメリカでは、一九八〇年代よりH・T・エンゲルハートらに代表されるように、功利主義的な生命倫理が主流となり、医療の臨床においては、個人の自己決定権が尊重された。それに対し、ヨーロッパでは、ドイツ胚保護法

に象徴されるように、神に授けられた生命の神聖性を受精卵や胚そのものの中に見出すので、個人の自己決定権よりも、神の摂理が重んじられ、先端医療技術の応用をめぐって慎重な姿勢をとる。アメリカが契約を尊重すれば、目的に応じて生命操作を可能とする方向にあるのに対し、ヨーロッパが伝統的な生命観を尊重し、保守主義にあるところは見落としてはならない。功利主義は、最大多数の最大幸福を求め、パーソン論にみられるように、ヒトの生命をその症状に応じて差別化するので、ドイツなどでは、功利主義の生命倫理は優生思想として批判されている。

その一方、遺伝子組み換え、ES細胞の活用などに、特許を認める世界の趨勢がある。ブッシュ大統領の施政方針にもあるように、アメリカは、バイオテクノロジー産業において世界の主流をめざしている。その点、生命は「操作と企業化の対象」になっている。

アメリカでは、医療を進めるために、四つの原則が、生命倫理において重視されるようになった[3]。その生命倫理の四つの原則とは、

(1) 自律尊重（autonomy）
(2) 善行（beneficence）
(3) 公正（justice）
(4) 無害（nonmaleficence）

の四つである[4]。

(1)自律尊重（autonomy）とは、患者の意思を尊重するということである。それは、一九七〇年代から、アメリカにおいて、医師のパターナリズムから、患者のオートノミーへと医療が方向転換したことを意味している。パターナリズム（paternalism）とは、父親的温情主義を指し、父親が子どもを護るような愛情で、医師の裁量権にまかせて、患者を治療することである。そこで、患者のオートノミー（patient autonomy）、すなわち自律性が重視され、患者の自発的な意思決定を尊重するようになった。いわゆる患者の人権、患者の自己決定の尊重である。この自律尊重の思想は、イマヌエル・カント（Kant, I. 1724–1804）の「自律（autonomy）」の概念と、スチュアート・ミル（Mill, J. S. 1806–1873）の「個人の自由の権限は、他人に危害を加えない限り何をしてもよい」という二つの思想を背景としている[5]。

(2)善行（beneficence）とは、「恩恵」とも訳され、医療者が患者の最善な利益を求めて行為することである。具体的には、幼児、または認知症や知的障害にある患者などが自己決定することがむずかしい場合に、この善行の法則が求められ、医療者は、患者の家族と相談しながら、患者にとって最良の治療法を選んでいくことが望まれている。

(3)公正（justice）とは、正義とも訳され、生命倫理の政策が、個人を尊重するだけでなく、社会において公正でなければならないということである。具体的には、医療資源の適切な配分や、先端医療技術に関する倫理指針を策定し、それを遵守するということによって、社会的に公正であることをめざしている。

(4)無害（nonmaleficence）とは、害を与えない、殺さない、痛みをもたらさない、誰かにとってよい機会を見逃さず活用するということである。しかし実際には、中絶や自殺、安楽死や尊厳死の在り方を考えるに際して、害を与えないということがどういう意味をもっているかを考えなければならない。

このようにして、ピポクラテス以来つづいてきた「専門家中心の医の倫理」から、「患者中心の医の倫理」へと重心を移してきたといえるだろう。(5)

インフォームド・コンセントによる自己決定は、患者の意思を尊重する道筋である。しかしまた、新生児や植物状態の患者、痴呆症の患者のように、自己決定できない患者の場合や、患者の自己決定が極めて患者にとって不利になる場合、また、貧困を背景とした臓器売買のように、患者の自己決定が生かされているいのちの尊さを傷つけるような場合などは、患者にすべてを任せることはできないから、自己決定に限界があることも知っておかなければならない。

三　仏教からみた自己決定と生命の尊厳

自己決定の在り方について、日本医師会の報告書によれば、次のように説明されている。

自己決定とは、結局、医師と患者との対話を通じて、患者が十分に納得できる決定をともに探ることである。そのためには、時間のゆとり、人のゆとりとともに、医師・患者ともに真意を述べあえる信頼関係の

存在が望まれる。医師は、患者が多かれ少なかれ心理的な危機に面した立場にあり、それを解決し支える立場にあるのが医師であることを、常に、十分に心得ていることが必要である。[7]

このように医師は自らの治療方針を押し付けることなく、患者の希望に耳を傾け、最善の治療を患者とともに選択していくことが重要である。また同時に、患者が自己決定できない場合や、患者の一方的な自己決定によって生命の危機につながるような場合は、医師や家族の知識と判断を総合して組み入れていくことがあわせて大切である。すなわち、自己決定とは、医師から切り離された患者個人において単独に成立するものではない。医師と患者と家族との相互の関わりの中で、患者にとってよい治療法を選択されていくべきであろう。

仏教の知見から見ると、一つの生命の尊厳は、あらゆるものが相互に支えあって生かされているという縁の中で育まれる。他に依らずに存在するものはない。すべてのいのちは数限りない因と縁が相互に関係しあって成立しているからである。人はさまざまな縁と愛情と努力によって、かけがえのない人に成長していくことができる。

個人の自己決定権や患者の尊厳は、医療者と患者、患者と家族との思いやりに満ちた絆のなかで育まれる。他に願われ、相互につながっていると実感するとき、一つの命はかけがえのないものになる。

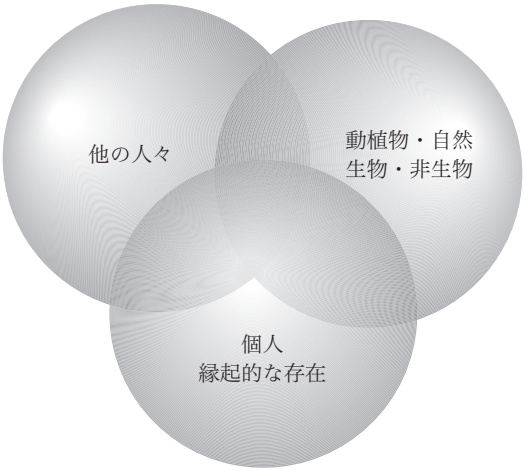
四　仏教の生命観の独創性

1　仏教生命観の特質

欧米における生命の尊厳が、神の似姿（image of God）である個人に見出そうとするのに対し、仏教における生命の尊厳は、あらゆる存在の相互関係性の中で成立し醸成される。

すべてが支えあっているという縁起の真理は、この世界をただ客観的に観察したものではない。縁起の自覚は、「相互につながっているという一体感」「生命への感謝・慈愛」を積極的に生み出していく。その仏教生命観は、縁起思想に基づき、次のように表現することができる。

仏教の生命観は、時間と空間を超えて、あらゆるものが相互に関係し、支えあっていることを知り、感謝



人はひとりで生きているのではない。
他の誰かに、自然に生かされている。
すべては相互に支えあって、移り変わり、循環していく。
「一切衆生悉有仏性」『涅槃経』
「この如来、微塵世界にみちみちたまへり」『唯信鈔文意』

あらゆるものは仏に成る可能性、仏性を有している。
あらゆるものに仏の慈悲が満入している。

仏教における生命観

して生きることを教える。また、そのとき、人が他の生命を奪ってしか生きえない悲しみを知り、相互に傷つけあっている現実をも知ることなる。人間は、それらありのままを自覚することによって、自己中心的なあり方を反省し、あらゆるものへのわけへだてない慈愛を育んでいくように願われている。

それでは、仏教生命観からどのような姿勢が生まれてくるのだろうか。仏教生命観は、自己が他のすべての存在との相互関係の中にあることを知り、自己中心的な在り様を反省して、自利利他の恵みを願って生きることをめざす。この仏教生命観を、海野大徹は次のようにわかりやすく説明している。

相互に支え合う縁起のはてしないネットワークは、単に空間的にだけではなくて、時間的にもつながっている。縁起のつながりは、すでに行ってしまった人々と、これ

から後に来るであろう人々とをともに現在において結びつける。そのような相互の結びつきを理解することによって、いのちに対する感謝の心は限りなきものになる。

The vast network of interdependence is not only spatial but also temporal. It connects people in the present with those who have gone before and those who will come after. In such an understanding of interconnectedness one's appreciation for life is limitless.[8]

縁起の見方は、万物一体感となってあらわれる。相手の中に自己を発見し、相互のつながりの中で、自己が知られてくる。人は、個人の幸福に焦点を当てているが、いったん、自己の人生が、どれほど多くの環境に支えられているかを理解できたなら、真実の理解をより大きく広げることができる。その広大な縁起の視座は、世界のあらゆるいのちとつながる分け隔てない慈悲の心を育んでいく。あらゆる生命の普遍的な苦しみの連鎖に気づくことを通して、翻って、普遍的な生命の連帯感が育まれてくるのである。

それでは、仏教の生命倫理学者であるロナルド・ナカソネとマルコム・デイビッド・エッケルの成果を踏まえながら、縁起思想の生命倫理学の特質を考えたい。

2　縁起の生命倫理学の独創性
――ロナルド・ナカソネの場合

縁起（pratītya-samutpāda）、複合語「プラティーティヤ・サムウトゥパーダ」は、二つの言葉から成っている。プラティーティヤとは、「～に依存する」ことを語義とし、サムウトゥパーダは、「共に生じる、つながりの中で生起する」ことを語義とする。原始仏教における縁起説は、さまざまな苦しみが無知ないし執着を縁として起こることを指し示し、まだ明確には相依性を示していない。[9]それが龍樹の中観派になると、縁起が相依相関性の意義を持った思想として明示されるようになる。[10]縁起とは、「すべての事物と生きとし生けるもの（衆生）は、時間と空間のなかにおいて相互に関連し、相互に依存している」という真理である。

ロナルド・ナカソネ（Ronald Y. Nakasone）は、この

縁起の思惟方法に、二つの特徴があるとする。[11] すなわち、その縁起の思惟方法には、

(1) 転変する中心（Shifting Centers）、

(2) 曖昧性（Ambiguity）、

という二つのものの見方の特徴がある。(1)転変する中心、という特徴は、縁起の思惟方法が、異なる意見を受容し、新しい発見についてオープンに受け入れる。縁起の見方が、偏執性をうまずに、柔軟な思考をうむということである。(2)曖昧性、という特徴は、縁起の思惟方法が、唯一絶対の中心を設定しない。すべての存在が等しく重要であることを示すということである。この仏教の思惟方法から、世界の苦しみを和らげ、相互に共生する道をひらくことが可能である。経済・政治の地球規模化、貧困、老人や子供の苦悩、先端医療などの課題に対し、古いパラダイムをあてはめて考えず、豊かな見方を開示することによって応えてゆける。境界域のものの見方、縁の見方が、今後培われていかなくてはならない。

縁起的視座は、一つの執着した見解に縛られないため、想像性と創造性をうみだす。すなわち、縁起の思惟方法は、偏見のない心と謙虚さをうみだすという特質を有している。

3 智慧と慈悲の生命倫理学の独創性
——マルコム・デイビッド・エッケルの場合

(1) 智慧の二つの働き

それでは、この縁起の自覚から生まれる智慧と慈悲が、生命倫理において、どのような姿勢をもたらすかについて明らかにしたい。

まず、生命倫理における仏教の智慧の二つの働きについて、マルコム・デイビッド・エッケル（Malcolm David Eckel）は、次のように論じている。

大乗仏教において、中道の思想は、真俗二諦、すなわち、二つの真実の特徴に表されている。究極的な真実の立場から見れば、あらゆるものは空である。世俗的、相対的な真実の立場から見れば、さまざまな物はすべて存在し大切にみなされる。智慧あることは、これら二つのものの見方から同時に世界を知ることである。あたかもあなたが手の中に宝石をもてば、その宝

石とあなたの手のひらとが両方同時に輝くのを見ることができるように。この智慧は自由を与える。そして智慧はまた、道徳的な誠実さと責任の自覚をもたらす。もし我々がこの智慧の理解を中絶についての議論や幹細胞をめぐる議論に導入するならば、二つのことをする助けとなるだろう。すなわち、智慧の理解は、胚の生命に対するある種の極端な執着から我々を自由にすることができる。究極的な真実から見れば、生命はただ一連の移り変わりつづける生物学的プロセスを名づけたものであるといえるだろう。しかし、世俗的な真実から見れば、この生命は、その源においても、人間としての可能性においても、深遠にして道徳的な重要性を有している。智慧は、これらの両方の見方を尊重するだろう。

In the Madhyamaka tradition that I know best, this idea of the Middle Path is expressed in a distinction between two truths. From the standpoint of ultimate truth, everything is empty of identity. From the standpoint of conventional or relative truth, things exist and have to be taken seriously. To be wise is to see the world from both these viewpoints at the same time, as if you were holding a jewel in your hand and could see radiance of the jewel and the palm of your hand simultaneously. This wisdom gives freedom, and it also gives a sense of moral seriousness and responsibility. If we bring this understanding of wisdom to the debate about abortion and the stem cell controversy it can help us do two things. It can free us from a kind of obsessive clinging to the "life" of an embryo. From the ultimate point of view, "life" is just a name we apply to a series of impermanent biological processes. But from the conventional point of view, this "life" has profound moral significance, both in its origin and in its potential as a human being.

Wisdom would hold both of these points of view together.[12]

ここに明らかなように、智慧の二つの働きとは、一つは、ヒト胚の生命を特別に神聖視するような極端な執着から自由にすることであり、もう一つは、生命を成長変化するプロセス全体の中で捉え、道徳的な誠実さと責任の自覚をもって、生命を護るということである。

(2) 慈悲から生み出される三つの姿勢

それでは、この智慧は、どのように慈悲の行動に移されるのであろうか。マルコム・デイビッド・エッケルは、中道の智慧が、現実世界において慈悲となって働きだすときには、三つの要素を帯びていると論じている。その慈悲から生みだされる三つの姿勢とは、

第一には、十分に効果的行動（effective action）でなければならない。

第二には、縁起的（dependent arising）にあらわれなければならない。

第三には、分析を必要としない状態で満足できる（satisfies without analysis）。

One branch of the tradition proposed three criteria: an action was conventionally real if it has effective action (*arthakriyā*), arises dependently (*pratītyasamutpanna*), and satisfies when it was not analyzed (*avicāramanohara*).[13]

というものである。第一の「十分に効果的な行動でなければならない」とは、生命操作を行う場合に、その結果がどうなるかを予測し、その効用性を判断するということである。生命操作にあたっては、動機だけでなく、結果もトータルで考慮する必要があるといえる。第二の「縁起的にあらわれなければならない」とは、一つの行動が一つの結果を生み出すだけでなく、さまざまな結果をもたらし、いろんな存在に影響を及ぼすことを考慮するということである。第三の「分析を必要としない状態で満足できる」とは、中道の智慧によりながら相手に接する時、ついには、もう分析の必要もなくなって、ただそこにいるだけで十分である状態に到達するということである。いわば、懸命に相手のために配慮を尽くした最後には、そばにいるだけで十分の慈悲に移っていくということである。

(3) 智慧から慈悲へ——分析のいらない愛情

きめ細やかに配慮する智慧から慈悲に移るとき、最終的には、ただそこにいるという慈悲のみが、深い意味を持ってくる。マルコム・デイビッド・エッケルは、智慧から慈悲への働きに移ることについて、次のように論じている。

分析が尽き、議論を必要としない状態が生じた時、はじめて我々は細やかに心を配る智慧の側面から、慈悲の働きに移っていく。すなわち、何にも計らう必要もなく、ただ単に我々が手を取り合って世界を共にした時に、心から心へと伝わる以心伝心の深い慈愛の世界が生まれてくる。

When the calculation is done and the arguments are over, we sit with each other and attend to each other's suffering. The cultivation of wisdom is part of that process, but in the end compassion is a contact of heart to heart.[14]

ここに明かされているように、智慧に基づく慎重な配慮は、命の尊さを守る過程の重要な一部分であり、しかしついには、慈悲こそが心と心を結ぶ絆となる。慈悲の行動において、最も重要な姿勢が、この分析のいらない愛情、ただそこにいる慈悲である。マルコム・デイビッド・エッケルは、彼の母を最後まで看取り、もう手を尽くす治療がなくなったとき、ただ母のそばに座っていた。何も分析する必要もなく、ただ母の手を握り、最後の最後までそこにいて、互いの苦しみに寄り添ったとされている。ここに何もできなくても、そこにいるという深い慈悲を見ることができるだろう。

以上見てきたように、智慧に基づく慎重な配慮は、その治療の過程において欠かすことのできないものであり、病状の改善をもたらすことができる。しかし何もできる術がなくなったとき、この分析のいらない慈悲こそが、病気の母と看取る息子との心と心を結ぶ絆を育むのである。生命倫理においても、分析だけでなく、分析のいらない慈悲によって、相手の心と自己の心とが結ばれていくことを最も尊重するべきであると思われる。

五　縁起の生命倫理学

1　「縁起の生命倫理学」の理念

(1)　法網の世界観

「縁起の生命倫理学」は、あらゆる生物・非生物は相互に関係し、相互に依存しあっており、いのちすべては形を変えながら循環していることを示している。

平川彰博士は、この縁起の特質についてこう記している。

自己は時間的にも、空間的にも、周囲とつながっているのであり、そのつながりはどこまでもつづいており、限りがないと言わねばならない。即ち法は、周囲と断絶している点において「個者」であり、最も特殊であり、周囲の力を自己に集めている。その点で、個人は普遍的な存在者であると言わねばならない。「人の生命は地球より重い」と言われるように、人間の個人にそなわる特殊性と普遍性も、かかる観点から理解することが出来る。それは、法が縁起によって存在するものであることによって可能なのである。[15]

自分と同じ存在が宇宙にいないように、一つの存在は他と区別される点で、特別である。しかし同時に、個人は周囲とつながっていて、周囲のさまざまな力に支えられて個人が生存している。その意味で、一つの存在は普遍的なつながりをもっているといえるだろう。

また、華厳の教理を大成した第三祖、唐代の法蔵（六四三―七一二）は、『華厳経探玄記』を著して、あらゆるものが円融無礙している法の世界を明かし、「十玄縁起無礙法門」を説いている。十玄縁起無礙法門とは、あらゆるものの相即相入の関係について説明し、十の視点から縁起の世界のあり方を説いたものである。この十玄門には、古十玄と新十玄とがあるが、その新十玄では、次のように説明されている。[16]

一　同時具足相応門（あらゆる現象が同一時に具足円備し、彼此照応する）

二　広狭自在無礙門（一多・純雑の相即相入を示す）

三　一多相容不同門（一つの事象と多くの事象とがその力やはたらきを互いに摂融するが、常に一多の特徴を失わない）

四　諸法相即自在門（一つの事象と多くの事象との体が、融通無碍であって、一即多、多即一である）
五　隠密顕了俱成門（一つの事象と多くの事象とは、隠顕があるが、互いに縁起を成立させて前後のないこと）
六　微細相容安立門（一つは多くを含み、多は一を容れ、一多の破壊しないことをいう）
七　因陀羅網鏡門（あらゆる事象が一多相即相入して、重重に映現し、隠映互いに現れて、尽きないことをいう。インドラの神の網に喩えられる）
八　託事顕法生解門（智という点から見て、縁起している事象は一つとして仮託されるものがない）
九　十世隔法異成門（世、すなわち時間という点から見て、一多の相即相入を明らかにする。過去・現在・未来が相即相入し、円環している）
十　主伴円明具徳門（あらゆる事象は、みな如来蔵心をその本性としていて、どれも心の外の実在ではない）

このように、十玄縁起が示すように、あらゆる存在や現象は、果てしなく深く関係しあい、一つひとつが全体の一つとなり、一つひとつが相互に融通しているといえるだろう。

あらゆるものが相即相入していることを象徴する喩えに、『華厳経』には、因陀羅網（インドラの網）という考え方がある。世界は網の目のようなネットワークになっていて、その結び目の一つひとつに水晶玉のような宝珠があり、それらが互いに相手を映している。映した玉がまた映して限りなく反映しあう。こうして多くの物が重重無尽に関係しあっている。その玉の一つひとつが実は人間であるとすると、人間一人ひとりが網の目の結び目に位置していて、互いに照らし合っているという。これを因陀羅網という。この『華厳経』では、一つひとつの存在が、相互に呼応して融けあって世界を形成していることを、一即多、多即一と表現する。また『華厳経』において「事事無碍」の思想が説かれている。それは、現象界の一切の事象は、個々一つひとつが相互に融けあって、互いにさまたげることがないことを意味している。宮沢賢治の『インドラの網』は、そのような相互に照らしあい、支えあって一つの宇宙をなしている世界観を描いた作品である。

⑵ 黄金の鎖（Golden Chain）の世界観

さらに、このような縁起にもとづく倫理を最もよく表わしたものに、米国仏教会(Buddhist Church of America)、浄土真宗本願寺派の寺院で愛唱されている「Golden Chain（黄金の鎖）」という成句がある。この「Golden Chain（黄金の鎖）」は、一九〇〇年代初頭に、ハワイで作成された暗唱文で、英語を母国語とする仏教徒には宗派を問わず重用されている。[17] 特に若い人が多くお参りする日曜日のお勤め（service）の場でいつも一緒に唱えられているという。

Golden Chain

I am a link in the Buddha's golden chain of love that stretches around the world. I must keep my link bright and strong.

I will be kind and gentle to every living being and protect all who are weaker than myself.

I will try to think pure and beautiful thoughts, to say pure and beautiful words, and beautiful deeds, knowing on what I do now depends not only my happiness, but also that of others.

May every link in the Buddha's golden chain of love become bright and strong, and may we all attain perfect peace.[18]

黄金の鎖

私は仏の愛の金鎖の一環であり、それは世界中に広がっている。私は自分の絆を明るく強く保たなくてはならない。

私は生きとし生けるものに親切で優しくありたい。そして自分自身よりも弱いすべての人々を守りたい。

私は今、自分の幸福ばかりでなく他者の幸福のためにできることは何かを知り、清らかで美しい思いをなすように、清らかで美しい言葉を話すように、清らかで美しい行いをするように精進したい。

どうか仏の愛の金鎖の環すべてが強く輝き、私たちすべてがともに安らぎの悟りに到達しますように。

この仏の慈悲の「黄金の鎖（Golden Chain）」もまた、あらゆるものが相互に支えあっているという縁起の世界観をよく示している。しかも、すべてが支えあってつながっているからこそ、その黄金の鎖と連結している自己自身が、

その絆を強く明るいものにし、あらゆるものとともに安穏をめざしていくのである。「黄金の鎖」は、縁起の真理にめざめるという智慧を明かりとし、すべてのものへ慈悲の姿勢をもって生きていくことをまことによく表現しているといえるだろう。

ケネス・タナカは、仏教倫理が、「強制的倫理（deontological ethics）」でも、「目的に達するための倫理（teleological ethics）」でもなく、「回心から自然と出てくる徳としての倫理（virtue ethics）」であると論じている。[19] すなわち、仏教倫理は、「〜しなければ救われない」という強制や自力的な行動ではなく、「〜させていただきたい」という自発的な行動であって、心の内面から自然にあふれてくる態度であるということである

これに加えて、ケネス・タナカは、この「回心に基づく徳の仏教倫理」が、人々に次の三つの方向性をもたらすと論じている。一つ目は、「一切衆生の苦しみを和らげることに努める」ということ、二つ目は、「謙虚な姿勢をもつ」ということ、三つ目は、「自分の行動に責任をとる」ということである。[20] すなわち、仏の摂取不捨の光につつまれて、自己反省がはじまり、その謙虚な慚愧から、自己の行動への責任と、他者への慈愛が育ってくるということである。このような三つの倫理的な姿勢は、いのちの尊さを守る生命倫理においても、また同じように重視されるものである。

このように縁起の生命倫理（bioethics of interdependence）は、私たちが他の生命体の視点から世界を見る力を培うことが求められる。縁起のバイオエシックスは、私たち人類が、あらゆる存在と一つであるという感覚（万物一体観）を養うことをも求める。人類の幸福だけを追求する功利主義的なバイオエシックスは、相互に生かされているという縁起のバイオエシックスに方向を転じていくべきであろう。

2 「縁起の生命倫理学」の方向性

この縁起の生命倫理においては、次のような十の方向性がうみだされるだろう。

〈縁起（interdependence）〉

(1) 研究の目的を明確にし、役に立つかたたないかとい

う有用性や効率性だけを基準にして生命操作をおこなわない。なぜなら、いかなるいのちも交換できないかけがえのないものだからである。

(2) 自己と相手との相互の関係性を壊すような行為をとってはならない。自己と相手との相互の豊かないのちの絆が育まれるように、医療の手段を選択していくことが望まれる。

(3) 医師から患者へのインフォームド・コンセント、および患者の自己決定権を最大限に尊重する。自己決定とは、医師と患者との対話を通じて、患者が十分に納得できる決定をともに探ることである。また、新生児や植物状態の患者、痴呆症の患者などのように、患者が自己決定できない場合や、患者の一方的な自己決定によって生命の危機につながるような場合は、医師や家族の知識と判断を総合して組み入れていくことがあわせて大切である。個人の自己決定権や患者の尊厳は、医療者と患者、患者と家族との思いやりに満ちた絆のなかで育まれる。

(4) 動機だけでなく、それによってもたらされる結果を予測し、その効用の是非を判断しながら、最善の道を選ばなければならない。そしてまた、現在だけでなく未来の世代への責任ある行動をとることが望まれる。

〈智慧（wisdom）〉

(5) 中道の智慧に基づき、極端な功利主義・快楽追従にも偏らず、また、極端な保守主義、科学排除の立場にも偏らずに、先端医療技術を活用する道を選択することが望まれる。

(6) 生命の安全性を守るために、現在だけでなく未来にわたって安全な方法であるかどうか、また、その患者個人だけでなくすべての人類や自然環境への影響がないかどうかを配慮することが望まれる。そのために、その生命操作におけるプラス面、効用性だけでなく、マイナス面、危険性を公表しなければならない。

(7) 先端医療技術は、人間に限らずあらゆる生命を保護するためにも活用することが望まれる。

〈慈悲（compassion）〉

(8) 縁起・無常・無我という究極的真理に照らしながら、一つひとつの生命をめぐる個別の現実をみすえ、

やわらかく、もっとも恵みのある道を、一人ひとりが自由に見出していくことが望まれる。生命操作の選択に際しては、多様性が尊重されなくてはならない。慎重な配慮と最善の治療を尽くした時、ついには、何の分析のいらず、何の計らいもいらない慈愛によって、患者の心と看取る者の心との絆をうみだすことが願われる。患者のいのちを大切に思うその答えは、一つではない。

〈感謝と謙虚さ（gratitude and humbleness）〉

(9) 自己の生命が他の多くの人々や自然との支えあいによって成立していることを自覚し、あらゆる生物・非生物への慈愛と責任と感謝の心をもって、謙虚に生きていくことが望まれる。

(10) あらゆるものは無常であり、移り変わっていく。人間が健康で長生きできることはすばらしいが、いのちあるものはすべて死に帰していく。いのちのもろさとはかなさをみすえながら、生命操作の方法を選択することが望まれる。人間の力には限界があることを知らなくてはならない。

結び　二つの視座

仏教の思惟と実践は、一つの倫理規定を強制するようなファンダメンタリズムではない。生命操作について、仏教学者が二者択一的な是非論を主張するだけでは、実際の苦しみにある患者の気持ちにはそぐわない[21]。仏教者がめざすべきは、科学技術の罪悪視や外からの批判ではなく、科学者と宗教者が相互の洞察に基づき助け合い、よりよい医療を樹立していくことである。

最後に、親鸞思想によりながら、縁起の生命倫理学のめざす二つの視座を提示したい。

(1) 比較価値よりも存在意味の尊重

比較価値としてみた生命とは、二つ以上の生命を比較して、生命の価値を序列づけて捉えるものである。それは有用性を価値基準として生命を序列づけて捉える見方である。これに対して、仏教の生命観は、価値の比較・優劣・序列によって捉えずに、一つひとつが相互依存しながら、有しているかけがえのない存在意味を見出そうとする。

これに関連して、親鸞は、如来のあらゆるいのちに対し

てかけられた慈悲を「一子地」としている。この親鸞の見方は、大乗仏教の「一子地」の思想に基づいている。親鸞の著した『教行証文類』の行巻には、「二つには念ずべし。慈眼をもつて衆生を視そなはすこと、平等にして一子のごとし」と記され、また親鸞は『浄土和讃』（一一四）に、「十方の如来は衆生を一子のごとく憐念す」と記されている。平等心とは、自己の都合によって相手を見ることをやめ、愛憎を超えて、すべてをわけへだてなく尊重する心である。一子地とは、阿弥陀仏があらゆる生きとし生けるものを自分の一人子のように大切に思う慈悲の心を意味する。したがって、平等心と一子地とは、自己と一切の生きとし生けるものを、かけがえのない存在として、同じように見守っていく心でもある。自己が仏にたった一人の子として願われていることにめざめたならば、自分自身が少しでもあらゆるいのちを一人子のように尊重していく方向を与えられるというのである。このように人間は、相互に支えあう世界において、それぞれがかけがえのない存在であるという真理に気づき、他の存在に向かう慈悲の心を育んでいくことが願われる。

(2) 人間の傲慢さへの内省

親鸞の生命観は、仏教生命観に基づきつつ、凡夫の罪業性に対する徹底した内省を通して、他のいのちを犠牲にしてしか生きえない悲しみを知り、すべてのいのちに対する感謝と謙虚さを培っている。

慈悲はあらゆるいのちを恐れから護り、相手のそばに寄り添って育む心である。しかし人間の慈悲には、必ず別れや行き違いを伴う。人間の愛情は、主観的で、自分の思い通りにならないと憎しみにさえ変わってしまう。このように人間の慈悲は、羽にくるまるような温かさとともに、はかなく、自分しか見えない醜さとを有しているのである。

親鸞は、人間の慈悲にはつねに限界があることを深く教示している。ここより、他者への慈愛は、自己の深い慚愧、罪業の自覚とともに仏の慈悲に摂取されている感謝からたちあらわれくるといえる。[22] 自らの至らなさに気づくとき、その自己を見捨てない仏の大悲に支えられて、生きとし生けるものへの慈愛が生まれてくるのである。

注

（1）*Encyclopedia of Bioethics*, p. xix, edited by Stephen G. Post, The 3rd edition, New York, Macmillan Reference USA, 2004.

（2）日本医師会『医療の実践と生命倫理』第Ⅷ次生命倫理懇談会報告書　日本医師会第Ⅷ次生命倫理懇談会委員　座長　森亘（日本医学会会長、東京大学名誉教授）。委員　有山雄基（奈良県医師会会長）、岩砂和雄（岐阜県医師会会長）、斎藤加代子（東京女子医科大学医学部教授）、嶋多門（福島県医師会会長）、武部啓（近畿大学理工学部教授）、中村雄二郎（哲学者）、鍋島直樹（龍谷大学法学部教授）、三木妙子（早稲田大学法学部教授）。

委員　村上郁夫（愛媛県医師会会長）、村上陽一郎（国際基督教大学教養学部教授）、米本昌平（株式会社科学技術文明研究所所長）。二〇〇四（平成十六）年二月。
http://www.chiken.osaka.med.or.jp/img/seirin15.pdf

（3）なお、ヨーロッパでは、「自律」（autonomie）、「尊厳」（würde）、「不可侵性」（integrität）、「傷つきやすさ」（verletzlichkeit）であるとされている。盛永審一郎「胚研究と人間の尊厳――ドイツの生命倫理論争」http://e-jts.com/~cogito/Ap.PDF3/MORINAGA.PDF

（4）大林雅之「バイオエシックスの原則」二九―三五頁参照。木村利人編『バイオエシックス・ハンドブック　生命倫理を超えて』法研、二〇〇三年。

（5）釈徹宗「生命倫理問題を通してみる日本宗教文化」三九頁。比較文化研究六三号、二〇〇四年。

（6）木村利人「医の倫理からバイオエシックスへ」二四頁。木村利人編『バイオエシックス・ハンドブック　生命倫理を超えて』。

（7）前掲書、一二頁。

（8）Taitetsu Unno, *An introduction to the Pure Land Tradition of Shin Buddhism: River of Fire, River of Water*, p. 141, New York: Doubleday, 1999.

（9）中村元博士によると、原始仏教聖典のうちの最古層には、次のようにある。「メッタグーよ。そなたは、わたしに苦しみの生起するもとを問うた。わたしは知り得たとおりに、それをそなたに説き明かそう。世にあるある種さまざまな苦しみは、執着を縁として生起する。じつに知ることなくして、執着をつくる人は愚鈍であり、くりかえし苦しみに近づく」（Sn. 1050–1051　中村元訳『ブッダのことば　スッタニパータ』一〇五〇・一〇五一　一偈）（中村元選集（決定版）第一六巻『原始仏教の思想Ⅰ』三九六頁）。中村元博士は、その後の縁起の語の成立について次のように論じている。『スッタニパータ』のやや新しい層では、縁起という語が成立するにいたった。ここでは業とその果報との理法を縁

起と呼んでいるらしい。『賢者はこのようにこの行為を、あるがままに見る。かれらは縁起を見る者であり、行為（業）とその報いとを熟知している。』（Sn. 653–654）。……『執着のこだわりを嬉しがっている人々には、「これを条件としてかれがあること」すなわち「縁起」という道理は見がたい。』」（中村元選集（決定版）第一六巻『原始仏教の思想Ⅰ』四一〇頁）。またアッサジという修行僧が説いたといわれる「縁起法頌」は、四つの真理（四諦）の説と同じものに帰着することは明らかであり、縁起の理法そのものが、人間の、また宇宙の真理（ダルマ、法）を端的に示していると、中村元博士は論じている（前掲書、四一五頁）。そのことは、「縁起を見るものは、法を見る。法を見るものは、縁起を見る」（MN. Vol. I, pp. 190–191）「世尊亦如是説。若見縁起便見法。若見法便見縁起」（『中阿含経』第七巻、大正蔵一巻四六七頁上）に説かれている。以上見てきたように、縁起説の根本意趣は、「これがあるゆえに、かれがあり、これがないときには、かれはない。これが生じるが故に、かれあり。これが滅するがゆえに、かれ滅す」（SN. Vol. II, pp. 262–264; MN. Vol. III, p. 63, etc.「此有故彼有」『雑阿含経』第一二巻、大正蔵二巻八四頁中・下。「因此有故、無此無彼。此生彼生、此滅彼滅。」『中阿含経』第四七巻、大正蔵一巻七二三頁下）にあらわされている。原始仏教において、縁起の思想は無常や無我の観念の理論的説明や、苦の原因への探求の中で説かれ、愛執を縁として苦しみが生まれるというという説である。縁起の最初期の意味は、「もろもろの因縁によって作り出されたものは、うつろいやすく無常であり、縁起せるものである」という意味をもっていた。（中村元選集第一六巻、五五五頁）。そして縁起説は、のちに苦しみの原因を究明する道筋、逆に言えば、解脱への道筋を明らかにする十二縁起説として整理されていく。その意味で、原始仏教における縁起説には、「相互に依存する」「相互に原因となる」という見方は少なく、相互依存という縁起の見方は、名称と形態との「相依」の場合に限られている（中村元選集第一六巻、五五一頁。平川彰著作集第一巻『法と縁起』参照。春秋社、一九八八年）。

(10)　中村元博士は、「万物の相互連関を説いたのは、仏教では中観派においてであって、原始仏教の思想ではない」と論じている（中村元選集（決定版）第一六巻『原始仏教の思想Ⅰ』四二九頁）。中村元博士によると、「原始仏教の縁起説はexistentialなものであって、logicalなものではなかったといいうるであろう。Logicalな点では中観哲学により、ontologicalな点では華厳哲学により、縁起説はのちに偉大な発展を示すことになった」（中村元選集第一六巻、五五一－五五二頁）。また同様の指摘は、三枝充悳博士『縁起の思想』（春秋社、二〇〇〇年）の中でもなされおり、三枝博士はその著において、縁起思想の思想的展開をきめ細やかに考

察している。三枝博士は、「縁起拙を解説するのに、とくに初期仏教の縁起説に関して、『これがあるとき……』というフレーズや、一時「相依性」と誤訳された「此縁性」に依存し、ましてその成立も不問のまま、その二つのみに終始している我が国の現状（の一部）は、初期仏教思想史を逆転していると評せざるを得ない」（『縁起の思想』二五二頁）と論じている。

(11) Buddhist Thought in the New Millennium: The Structure and Relevance of Buddhist Thinking, 2003 June. ロナルド・ナカソネ「新世紀の仏教思想：仏教的思惟方法の構造と重要性」一〇七－一二七頁。武田龍精編『仏教生命観からみたいのち』所収、法蔵館、二〇〇五年。

(12) Malcolm David Eckel, “Compassion and Wisdom: Buddhist and Christian Reflections on the Fundamental Problems of Bioethics,” 2005 Nov. マルコム・デイビッド・エッケル「智慧と慈悲　生命倫理の基本的課題に関するキリスト教と仏教の洞察」一〇頁。『仏教と生命倫理の架け橋』所収、法蔵館、二〇〇八年。

(13) 前掲書、一二頁。

(14) 前掲書、一三頁

(15) 平川彰著作集第一巻『法と縁起』六四頁、春秋社、一九九三年。

(16) 中村元『仏教語大辞典』上巻、六五二頁参照。また、その古十玄を説明すると、次のごとくである。一つには、すべての法（事象）が同時に備わって一縁起となる。二つには、一と多とが互いに相手のうちに入りこむ。三つには、多と一とが互いに同化しあう。四つには、一切が一の中に映り、その一の中の一切のうちに、また一切が映り、無限に重なっている。五つには、小と大とが互いに入りあう。六つには、ある面が表に出ている時は、ある面は隠れていながら同時に並存している。七つには、一つの行（形成されているもの）のうちに一切の諸法（あらゆる存在現象）を含むように、純粋なあり方と多様なあり方が混融する。八つには、過去・現在・未来やさらに細分化した十の時間の位相のどれもが他の時間の位相を含む。九つには、一切の諸法は心が転じたものである。十には、具体的な諸現象や事物のすべてが、深遠な法門を現していて人々を悟らせる。これらの十の法門が融合して一縁起をなすという。

(17) ケネス・タナカ「現代社会における浄土真宗の倫理　グローバルな視点」五五頁。親鸞教学七九号、二〇〇二年。

(18) *Shin Service Book*, p. 15, Buddhist Church of America, Jodo Shinshu Hongwanji-ha.

(19) ケネス・タナカ「現代社会における浄土真宗の倫理　グローバルな視点」五六－六一頁。

(20) ケネス・タナカ、前掲論文、六一－六三頁。

(21) 木村文輝『生死の仏教学』一五〇－一五一頁。法蔵館、

二〇〇七年。

(22) 玉木興慈「親鸞における常行大悲の意味」参照。『死と愛　いのちへの深き理解を求めて』法蔵館、二〇〇七年。